

氏 名	ウス ク ボ 薄 久保	カオル 香	
学 位 の 種 類	博 士	(美 術)	
学 位 記 番 号	博 美	第 288 号	
学位授与年月日	平 成 22 年 3 月 25 日		
学位論文等題目	〈作品〉 unidentified garden 〈論文〉 “unidentified land 未詳の地” への旅行計画－分離と結合が誘 う絵画の可能性－		
論文等審査委員			
(主査)	東京芸術大学	教 授 (美術学部)	絹 谷 幸 二
(論文第 1 副査)	〃	〃 (〃)	越 川 倫 明
(作品第 1 副査)	〃	〃 (〃)	坂 田 哲 也
(副査)	〃	〃 (〃)	佐 藤 道 信
(〃)	〃	准教授 (〃)	齋 藤 潤
(〃)	豊田市立美術館	キュレーター	天 野 一 夫

(論文内容の要旨)

20世紀以降、現在に至る美術において、その手法や素材は劇的かつ多様な変化を見せ、さらに互いに融合と進化を遂げ続けている。そのため、それら全てに的確な命名や定義付けをする事は、非常に困難を要する。例えば、コラージュもその一つだろう。既成の印刷物、布やオブジェを切り離し、再構成する事によって、物質的構造と、意味の構造を変革させるコラージュが、西洋美術史における、一ジャンルとして確立されたのは20世紀になってからである。そして、時代とその解釈においてモンタージュ、アッサンブラージュといったように名前も変化を遂げている。しかし、これらの定義もまた非常に曖昧である。

私の作品の制作過程の主軸として、このコラージュ的手法は非常に重要な役割を果たしている。しかし、私自身、このコラージュという言葉が、実際に自分の行っている行為に対して的確であるのかについて懐疑的であり、不明瞭な部分がある。

私の作品は、写真、コラージュ、絵画といった、様々なジャンルが宿命的な関係性で結び付いて出来ている。この手段は、美術史的な観点だけを踏まえて制作に取り入れたものではなく、ごく自然発生的にその行為に関わっていたという事実と、現代におけるツールの劇的な進化が背後で関係している。また、コラージュとは、完成された物の分解と、未完の物の結合という、両極行為の間に存在する境界地点である。

私はこの事に気がついた時、それまで顕在的に意識していなかった重要なもう一つの主題を発見する事になった。それは、意識と無意識、ミクロとマクロ、限界と無限といった、対になる事柄だ。私が制作を試み、そして生きる上では、それら一対の相反する事柄への意識を常に向けてきたように思われる。

本論文は、自身のこの疑問に迫るべく、コラージュ及びそれに付随する概念の発祥を辿りながら、自身が探ろうと試みる問題を明らかにするものであり、さらにその先にある絵画を制作するという行為との関係性について追求するものである。以下に、各章の概要を述べる。

第1章 デペイズマンー結合の始まりとしての分離点

第1章では、デペイズマンをキーワードに、シュルレアリスム（超現実主義）を中心にその歴史を振

り返り、その意味を紐解いてゆく。私の作品には偶然の事実としてデペイズマンの手法が含まれている。「デペイズマン」(dépaysement)とは「デ(dé)」は分離、剥奪を表す接頭語であり、「ペイ(pays)」とは「国、故郷」を指示している。つまり本来の国から引き離して別の国に持っていくというのが元の意味になり、本来あるべき場所から物やイメージを切断し、別の場所に配置すること、既成概念の層を組み替え、さらにそこから生じる驚異を指している。「デペイズマン」は、自分の知識、認識に本当は確実性が存在せずに、認識次第によって、事物の思いもよらぬ側面がリアリティを獲得する事を私達に示している。そして、得られた結果には「変」「驚異」と言った表面的事象以上に、「認識」「真実」とは何かという、人間の普遍的問いと回答の端緒が隠されているのだ。

第2章 アンフラマンズー体感される次元の通路

デペイズマンは転置という方法によって、一つの結合と分離の形を示している。それは何か大切な事を暗示しているようであるが、それはまだ明らかではない。思考の転換においてデペイズマンは重要な役割を果たしている。本章ではこの論文の結合と分離においても一つの重要な手掛かりとなるマルセル・デュシャンの提唱した「アンフラマンズ」という概念を中心に、自身のモチーフ制作、コラージュ、写真、絵画という作品に至るまでの行動と、体感の意味性について論考するものである。そこには今世紀におけるツールの劇的進化が関係していた。思考と体感の境界を溶解させるデジタルツールのもたらすものは何であるのかを、イメージと身体性の観点から論考する。

第3章 2極と1対一極薄の到達点

私にとって、「絵画」とは客観的視点と主観行為の集積であり、思考と身体との繋ぎ目である。私の絵画は、視覚的イメージと、膨大なまでの身体行為の結果から生み出されるものである。本章では、イメージの中に存在している意識と無意識の奇妙な関係性を探ると共に、イメージを超えて絵画の中に存在している視覚出来ない力について、私自身の解答に迫りたい。絵を描くということは図像の向こう側の世界に足を踏み入れる行為なのである。

終章

なぜ、日常的世界の中に「未詳の地」を見出す必要があるのだろうか。それは、結果として、自分の意識を探索する旅でもある。人間は本質的に「知る」事を止めずにはいられない生き物である。世界の謎を一つ解くことによって、完全な世界への到達点を目指すか、一つの謎を解く事は、新しい謎を手に入れる事でもある。今、私が自分の意識や、真実についての答えを追求せずにはいられないのは、21世紀の日本の中で、私がとてつもない「途中の場」を生きているからだだろう。デジタル化された情報と、大量生産された物が氾濫する日本の環境で生きる私達にとって、真実を見極める事は容易ではない。しかし、だからこそ私はそれを求めずにはいられないのだ。

「ビロードのズボン・・・(歩いているときの)二本の足のこすれ合いでできる軽い口笛のような音は、音が示すアンフラマンズ分離である」(聴覚的アンフラマンズ)。あるいは、「(ひじょうに近いところでの)銃の発射音と標的上の弾痕の出現の間にアンフラマンズな分離」がある(聴覚的・視覚的アンフラマンズ)。アンフラマンズとは、あるものとあるものとが分離するとき見いだされる。あるいは、「(ひとが立ったばかりの)座席のぬくもりはアンフラマンズである」(視覚的・触覚的アンフラマンズ)。「ひとが眼差しに提供するもの[いかなる分野であれ眼差しに差し出すためのあらゆる実行]と、(ちらっと見てすぐ忘れてしまう)大衆の冷ややかな眼差しとの交換。ほとんどの場合、この交換はアンフラマンズな分離の価値をもつ(つまり、あるものが賞賛され、注視されればされるほど、アンフラマンズな分離は少なくなるということである)」。凝視するとき、アンフラマンズは逃れ去る。マルセル・デュシャン 東野芳明＋多木浩二「アンフラマンズ解説」『ユリイカ マルセル・デュシャン』、

青土社、1983年10月号より

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は筆者が自己の創作の背景をなす思想を語ったものである。筆者の作品の代表的な手法は、写真を利用したデジタル画像によるコラージュを構想のベースとしつつ、現実と非現実、意識と無意識の境界領域を喚起させる独特な雰囲気イメージを、大型の画面にオーソドックスな絵画技法で再現する、というものである。筆者はこのような手法を「ごく自然発生的に」選択してきた、と述べるが、本論文は自己のイメージ世界をあえて20世紀におけるいくつかの芸術上の傾向と結びつけるとともに、そのような手法が現代的なコンテキストのなかでもちうる意味について論じたものととらえることができる。

第一章では、シュルレアリスム絵画のキーワードである「デペイズマン」の概念をとりあげ、対象を日常的・常識的な文脈から「分離」し、意想外なカタチで「結合」する手法について論じられる。続く第二章では、マルセル・デュシャンが言及した「アンフラマンズ」、すなわち存在がひとつの次元から他の次元に移行する分離の瞬間に生ずるつかのまの感覚がとりあげられ、それが筆者の制作における本質的要素であることを論じている。筆者はこれらのキーワードによって、自己の制作上の感覚に位置づけを与えるとともに、これらの概念が現代の劇的に進化したデジタル・ツールの環境においてもちうる意味の拡大について考察を広げている。

第三章においては、もっぱら自己の制作を軸としつつ、「意識と無意識」をキーワードに、自分が用いる典型的なモチーフ（「海」や「子供」）について考察を試みている。これらのモチーフは、筆者の思考の中心をなす「分離」と「結合」、「境界領域」を体現するモチーフとして位置づけられ、最終的に、それらが喚起するイメージが集散的無意識の概念と結び付けられている。

本論文の第一の成果は、筆者が自己の制作のあり方を内省し、「未詳の地」という題名に表現される通り容易にはとらえ難いあいまいな境界上のイメージ世界を、シュルレアリスム系の造形思考の系譜の上に位置づけ、作品に内在する認識論的な問いかけの性質をあえて言語で示したことにある。第二に、このような問題提起を現代のデジタル環境のなかへと拡大・敷衍し、そこで予感される無意識世界の表現の可能性について論じている点が注目されるであろう。確かにこの後者の視点は、非常に大きく不確定な問題をはらむがゆえに、筆者の論述はいまだ強く一貫した方向性と説得性をもつにはいたっていない印象を受けざるを得ない。とはいえ、筆者が制作を通して取り組んでいるアクチュアルな問題を、可能な限り言語化して表現しようとした本論文の試みは、高い評価に値するであろう。それは、20世紀のシュルレアリスムの遺産が、現代の新たな状況のなかでもちうる展開の可能性を示す事例としても十分に興味深いものがある。

(作品審査結果の要旨)

薄久保 香の作品は清明な明るさの中に生長する幼児の生命力とある種の不安や危惧がしなやかな感性のもと、優美に描かれている。何気ない日常の断片で見る身体の不思議な存在や、大自然の中に漂着する紙飛行機と、その海辺でたたずむラブラドル犬などを、たぐいまれな描写力で楽々と描き込むその筆力と、魅力あふれる詩的な感性は、薄久保独自の空間を創り出してあまりあるものがある。

現代絵画が共有する「軽み」の中に現代人であれば誰しもが求める「癒し」の波動が見る者全てをつつみ込み、生きて存在する喜びが画中の隅々を支配している。

彼女は、東京藝術大学後期課程絵画専攻の学生として、早くから社会と接点を持ち、TARO NASUギャラリーを中心に個展、グループ展を行い世界的にも熱い注目を受けている大変優秀な作家でもある。東京、ソウル、台北、シカゴ、ベルリンなど世界各地で活躍し、将来性豊かな発表活動を行っている。

本年1月に油画科の絵画領域におけるそれぞれの専門分野の審査委員によって特に高い評価を受け、課程博士に相当する作品であるとの結論が出た。

(総合審査結果の要旨)

薄久保香は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程絵画専攻の学生として「unidentified garden」を大きなテーマとして制作を行っている。博士課程の頃よりTARO NASUギャラリーでの個展発表を軸に、「up lgist」Wohnmaschine(ベルリン)や2008年には「NEXT 2008」(アートフェア/TARO NASUブースでの個展(シカゴ))と内外に渡って企画展にも参加し、多彩な領域で国際的に活動している。

薄久保の作品は、しなやかな感性に色どられていながら、絵画の骨格に強さが秘められ、たぐいまれな描写力が見る者を彼女の詩的な領域に引き込みとらえてはなさない。

作品画中にある薄久保の世界は、現代人であれば誰もが求める「癒し」の安らぎと、一抹の「不安」が内在してその両者が「軽み」の中で絶妙のハーモニーを奏でていて美しい。

論文においてはデジタルと身体性という現代を捉えた問題を、主観的な見解に留める事無く、20世紀の美術史と哲学と共に非常に優れた考察を述べた。

特にマルセル・デュシャンの「アンフランクス」という長きに渡り解釈が困難とされる概念について果敢に考察がなされている点は高く評価したい。

また、彼女の作品は、構造的な問題を主軸としながらも一点の絵画が持つ「唯一」の存在感を証明するかのような強さをも作品に宿しているといえる。

以上、薄久保 香は論文と作品により、時代の先駆となる思想と表現を論理的かつ、豊かな感性において実証している。よって油画科の絵画領域におけるそれぞれの専門分野の審査委員と論文審査委員全員によって特に高い評価を受け、数回に渡る論議の上、厳正な判断のもとに、本論文と作品は課程博士の学位に相当するものであるとして、全員一致の上、合格と判断することにした。